

染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和8年1月
第 139 号
毎月 1 日発行

古今正月

数日前の新聞で、「大手百貨店が初売りを控えめにする」と報じられました。物価高、人手不足も相まって、三十年くらい前までの「風物詩」も、時代とともに変わってゆくのだろうと、改めて思いました。

そして、滝廉太郎作曲の「お正月」の頃はどんな過ごし方だったのだろうと気になり、調べてみました。

正月の意味…昔の人にとって正月は、一年の実りと命を司る「年神様」を各家庭に迎える神聖な行事でした。門松は神様が迷わないための目印、鏡餅はお供え物としての役割がありました。

数え年…かつての日本では「数え年」を用いていたため、誕生日に関わらず、元日に国民全員が揃って一歳年をとりました。そのため、元日は今よりもずっと盛大な「共通の誕生日」のようなお祝いの日でした。

小正月…一月十五日を中心に、豊作を祈願する行事が行われました。餅花を飾ったり、小豆粥を食べて無病息災を祈ったりするのが一般的でした。

遊びと交流…一月の「睦月」の語源が「親族が睦み合う（仲良くする）月」であるように、親戚や近隣の人々が集まり、凧揚げ、羽根突き、百人一首などの伝統的な遊びを楽しみました。

ホームページ



おて LINE



Facebook



このように一月は、単なるカレンダーの区切り以上の精神的な意味を持っていました。こうして昔を振り返ってみると、忙しさの中にも楽しさが存分に詰め込まれている印象があります。



（昭和初頭）

令和のこんにち、選択の自由と、効率化によって獲得した時間を、私たちは本当に有意義に使っているのか、いかがでしょう。

いずれにせよ、まだ私たち日本人にとって正月はとっても大きな節目です。そしてこの節目に、身も心も清めたいものです。先人の知恵と歩みをあらためて訪ねながら、相変わらず生きづらいこの世界を、共に生きてまいりましょう。

本年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（住職）

真宗用語の基礎知識



【門徒】

似た言葉に「檀家」がありますが、比べて考えるとわかりやすいです。

「檀家」…家単位でお寺を経済的に支える側面が強い。

「門徒」…真宗の信仰を主体とし、教えを中心に生きるという側面が強い。

ちなみに、門徒さん同士を「お同行（おどうぎょう）」と呼ぶこともあります。

真宗の信仰を主体にするので、世間の常識（暦、方角、命名の画数などの良しあし）にとられないので『門徒もの知らず』と皮肉を言われたのです。（『世事に迎合しない真宗』…そのような背景もあって、薩摩藩によって長らく激しい弾圧を受けた真宗ですが、今年『薩摩開教150年』なのだそうです）

ちょっと あたまの こりほぐし

タヌキが

宝くじを買いました。

いくら当たったのでしょうか？

★「たぬき」、「たぬき」、「たぬき」・・・

こたえは裏面



おてらより

今年の行事です

春★3／20（金）14時

春のお彼岸・永代経法要
講師…川田信五先生

（東かがわ市・大信寺）

夏★6／4（木）5（金）

第56回鴨川組念仏奉仕団

西本願寺へ1泊2日

★8／16（日）10時

孟蘭盆会（お盆法要）

「医療×仏教トーク（仮）」

ゲスト…野島洋樹先生

（野島ホームクリニック院長）

秋★9／20（日）14時

秋のお彼岸・永代経法要

講師…三木秀海師

（倉敷市・清楽寺）

冬★12／6（日）10時と14時

報恩講

講師…丸山文雄先生

（新潟市・萬榮寺）

その他「ラジオ体操」「平和の鐘」「小さな音楽会」「おてらうんじ」はLINE、フェイスブック、ホームページにて…

じねんほうに
自然法爾の世界

新年おめでとうございます。

ある人が一休和尚をたずねて、「何かおめでたい言葉を書いて下さい」と所望しました。快く承諾された和尚は、さらさらと、

親死ぬ 子死ぬ 孫死ぬ

と書いて与えられました。これを見たその人は、露骨に不満の意を示しました。

和尚はその心情を察知して、直ちに、

孫死ぬ 子死ぬ 親死ぬ

と書き直し、「これではどうか」と尋ねられました。やっと和尚の真意が分かったその人は、和尚の前に手について謝った、といいます。

ともすれば私たちは、自分の思うようにゆかないと不平不満を表わします。しかし、今も昔も老少不定（年を取った・若いという境目がなくいつ何が起きても不思議ではないこと）、順序不同で死んでゆきます。順番通りに死んでゆけたら一番おめでたいことであります。良寛和尚も、

災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。
死ぬる時節には死ぬがよく候。

とっておられます。行雲流水、それが禅家の心であり、達人にして到達できる世界です。

しかし不思議にも、真宗の人で同じところを歌った人がいます。

岩もあり 木の根もあれど さらにさらと
たださらさらと 水の流るる

（甲斐和里子女史）

その源泉は、親鸞聖人の「自然法爾章」に端を発していることは明らかです。

私たちにとっては、ただ念仏、自然法の世界を聞思するより外はありません。

（村上速水『路の臺』平成4年）

●一休和尚（一三九四―一四八一）臨済宗。諱は宗純。大徳寺住。八十八歳寂。清趣に富み、詩文書画をよくする。

●良寛和尚（一七五八―一八三二）曹洞宗。越後出雲崎の人。四十三歳で故郷に帰る。七十歳寂。寡欲恬淡、和歌・俳句・詩・書に秀づ。

●甲斐和里子（一八六八―一九六二）九十歳没。広島県生。京都女子専門学校（京都女子大学の前身）を創設。著書『草かご』。

●「自然法章」（『註釈版聖典』六二二頁、七六八頁）

「念仏もうさるべし。」

『蓮如上人御一代記聞書』『真宗聖典』八五四頁

「あけましておめでとう」、新しい年を迎えることができた喜びがここには込められています。それは決しておめでたい出来事が続いているということではありません。かえって問題多き現実を生きているからこそ、新しい年に対する期待が大きいのです。「今年こそは良い年でありますように」とは、いつの時代も願われてきたことではないでしょう。

表題に挙げた言葉は、蓮如（1415―1499）が京都の勧修寺村に住む道德という人に向かって語った言葉として伝えられるものです。道德は日頃から蓮如を尊敬し慕っていました。明応二年（1493）の正月一日に蓮如を訪ね、新年の挨拶を申し述べたのです。その道德に対して蓮如は「道德はいくつになるぞ。道德、念仏もうさるべし」と語ったのです。年号から計算すると蓮如が七十九歳、道德は五つ年下です。から七十四歳の時のことであることがわかります。

「念仏もうす」とは、自分にとって都合の良いことを仏にお願いすることではありません。また、悪いことが起こらないようにするための呪文でもありません。仏の教えを念ずることを通して、自分の生き方を見つめ直すことにほかなりません。長い間、蓮如の教えを聞き続けてきた道德がそのことを知らないはずは

ありません。しかし蓮如は年の始めに当たって、改めて念仏をすすめているのです。

おそらく道德は、お正月のお参り（修正会）にやってきたのでしょう。それはややもすると、年中行事として儀礼化してしまうものです。蓮如の言葉は、いくつになっても決して忘れてはならない原点が、念仏であることを教えています。そこには念仏を離れるならば、忙しさに追われて自分の生き方を問うこともない私たちの姿が見据えられていると思います。

今年はどうなことがあるだろう、と期待に胸をふくらませるお正月。そんな私たちにとって、蓮如の「念仏もうさるべし」という言葉は、何をより所として生きるのかを呼びかけています。それがはつきりしない限り、一年はまたもや空しく過ぎることになるのではないでしょう。

（大谷大学「読むページ」2000年1月）

